

はじめに

本書は研究者のみならず、『源氏物語』をより専門的に読んでみたいと思う大学生・大学院生や中高の教員、一般の方々に向けて、研究のおもしろさを伝えるガイドブックを目指したものです。

『源氏物語』は日本古典文学の最高峰といわれ、汲めども尽きぬ魅力をたたえた作品です。後代にも大きな影響をあたえて、文学の領域のみならず、絵画・演劇・芸能など広く文化全般に及んでいます。作家による現代語訳も近代から何度も試みられ、世界でも数多くの言語に翻訳されています。『源氏物語』はいまや世界文学の一つといっても過言ではありません。

一方、この物語は中世以来の膨大な研究史を抱えて、また毎年、夥しい数の論文や研究書が量産され、専門の研究者でもその全貌をつかむことは困難になっています。まして『源氏物語』の世界に足を踏み入れたばかりの方々は何を読んだらよいのか、迷いが生じるのは当然のことでしょう。

かつては『國文學 解釈と教材の研究』『国文学 解釈と鑑賞』といった国文学専門の月刊雑誌があり、「源氏物語をどう読むか」などテーマ別に研究史が整理され、今後の課題など示す特集がしばしば組まれていました。それが『必携』シリーズや『源氏物語を読むための基礎百科』といった形になることもありました。しかし、そうした専門誌が廃刊となり、世に『源氏物語』の論集や入門書は溢れているものの、その後の研究状況や今後の研究の可能性など把握しにくい状況になっています。しかし、それぞれのテーマで新たな世代による斬新な研究成果も、今日まで着実に積み上げられてきた筈です。

そこで本書では、研究者のみならず、学生や一般読者の関心に資するような25のテーマを設けて、実績のある先生

方に執筆をお願いしました。テーマは、本文・注釈・書誌学をはじめ、仏教・儒教など思想、史実や先行作品との関わり、和歌や漢詩文などの引用、花鳥風月など自然、音楽・匂いなど五感に関わるもの、建築・庭園や衣装、通過儀礼など生活や風俗、噂・名・メディアなど語りとの関係、皇女や女性などジェンダーと関わるもの、絵画や現代語訳、国語教育など享受や教育のほか、重要なものを取り上げました。

本書の構成は、『源氏物語』の展開に沿って読みやすいように、一つの巻を中心にテーマ別で論じたものを巻順に並べた25章（桐壺巻×浮舟巻）となっています。そのテーマを設定することで、いかに『源氏物語』の巻々が新しくみずみずしく読めてくるのか、その可能性について具体的な事例を示しました。また各章にテーマの概要と研究の展望を配して、これまでの軌跡を総括しながら、研究の最前線を示す書籍を目指しています。最後に物語全般に関わる「参考文献・データベース・サイト一覧」を加えて、『源氏物語』についての調査・研究をスタートさせる際に有益なものを示しました。各サイトについてはURLを読み込めるQRコードも付けたので、ご活用ください。

本書が専門の研究者はもとより、学生や一般読者に源氏研究の魅力を伝えて、未来に向けて複眼的な思考を促す手引きともなれば、編者としてこれに勝る幸いはありません。最後に、ご執筆の先生方をはじめ、構成など様々なアイデアを提供してくれた共編者の松本大氏、編集作業を迅速に進めてくださった武蔵野書院の前田智彦社長に心から謝意を表します。

二〇二三年八月

河 添 房 江

目 次

はじめに	河添房江	0
* * *		
1 桐壺巻×歴史	今井 上	0
歴史的研究の課題と展望		
2 桐壺巻×国語教育	古屋明子	0
「長恨歌」との比較から桐壺更衣の人物像を読む		
3 帚木巻×仏教	松岡智之	0
仏典精査の研究を基礎づける		
4 帚木巻×噂・名・メディア	水野雄太	0
噂から読む、『源氏物語』の物語観		

5 空蟬卷×本文 新美哲彦 0

6 若紫卷×書誌学 書物が教えてくれること 佐々木孝浩 0

7 若紫卷×絵画 若紫卷の源氏絵 稲本万里子 0

8 紅葉賀卷×注釈 よーこそ、注釈の世界へ 松本 大 0

9 花宴卷×作者・紫式部 藤原道長家と「源氏」の物語 中西智子 0

10 賢木卷×現代語訳 「現代」の言葉で古典をどう再現するか 大津直子 0

11 須磨卷×漢詩文 訓読という回路を使って漢詩文世界とつながる 長瀬由美 0

12 漆標卷×動物・鳥 海辺の鳥から四季の鳥へ 草野 勝 0

13 蓬生卷×建築・調度・庭園 寝殿造の廃墟の美学 倉田 実 0

14 薄雲卷×語り 作中人物と語り手の「話声 (narrativevoice)」を聴きとる 陣野英則 0

15 薄雲卷×儒教・孝 物語に見る「御学問」と儒教的「孝」 趙 秀全 0

16 玉鬘卷×衣装 衣装表現を読むということ 畠山大二郎 0

17	行幸卷×先行作品		
	大原野行幸の贈答歌と『伊勢物語』	吉野 誠	0
18	梅枝卷×唐物		
	唐物から国風文化論へ	河添房江	0
19	若菜上卷×自然・風		
	女三の宮降嫁と密通事件に表れる〈風〉	山際咲清香	0
20	若菜下卷×音楽		
	平安時代の音楽と物語の音楽	西本香子	0
21	夕霧卷×皇女		
	「紫の上の述懐」と皇女の生	本橋裕美	0
22	幻卷×和歌		
	作中歌・引歌・歌ことは	鈴木宏子	0
23	匂宮卷×薰物・香		
	「その道の人」匂宮の前裁へのまなざし	田中圭子	0
24	竹河卷×通過儀礼		
	通過儀礼と皇位継承から竹河卷を読み直す	高橋麻織	0
25	浮舟卷×女性・ジェンダー		
	女の位置をめぐる浮舟という行為体 <small>エージェンシー</small>	斉藤昭子	0
	* * *		
	参考文献・データベース・サイト一覧	草野 勝	0

歴史的研究の課題と展望

今 井 上

概要——准拠論の隆盛

個性ゆたかな登場人物たちと複雑な人間関係、そしてなにより起伏に富んだ筋書、そこに『源氏物語』の魅力があるのは間違いないが、しかのみならずこの物語にはもう一つ別の、次のような楽しみ方もある。すなわち『源氏物語』には、白居易の『長恨歌』に代表される中国文学や、和歌や先行する物語、さらには古伝承や神話のかずかずも貪欲に取り込まれていて、読者からすると、物語の背後にある多様な典拠をさぐりだし、作者がそれらをいかに自然に、どのように工夫をこらして作品世界のうちに溶け込ませているか、それを味わうこともまた、この物語ならではの楽しみと言ってよい。

そうした典拠の一つに、歴史上の事件や出来事、實在の人物の事蹟があり、こうした歴史的な素材を『源氏物語』研究の分野では、他と区別して「准拠」と呼ぶことが、現在、一般的になっている。物語に踏まえられた史実を明らかにしようとする研究は、戦後、ひじょうに盛んとなり、こんにちでは個別の論文や研究書にあらずとも、注釈書の頭注欄や脚注欄、文庫本の付録などにも、紫式部の念頭にあったとおぼしい史実が列挙されている。物語の准拠と

して取りざたされる史実も増加の一途をたどっているが、さればこそ、そこにはさまざまの、看過できない問題も生じはじめているように思われる。本章では、虚構と史実の関係をどう考えてゆくべきか、その課題と展望を、桐壺と紅葉賀、ふたつの巻に即してあきらかにしたい。

読む——「紅葉賀巻の朱雀院行幸」と「桐壺巻の三歳源氏内裏退出」

説明の都合上、まずはじめに紅葉賀巻を取り上げたい。⁽¹⁾当該巻は、次のように幕を開ける。

朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、もの見給はぬことを口惜しがり給ふ。上も、藤壺の見給はざらむをあかず思さるれば、試楽を御前にてせさせ給ふ。
(紅葉賀①三二一)

〔訳〕桐壺帝が朱雀院に行幸なさるのは十月の十日過ぎのことである。格別の、素晴らしいものになるのが間違いない今回の催しであるから、きさきたちは、その見物がかなわないことをくちおしがりなさる。桐壺帝も、藤壺がご覧になれないのを残念に思いいったので、その予行演習を清涼殿の前庭でさせなさることにした。

桐壺帝が光源氏をともなつて、太上天皇のもとに行幸するのは十月十日ごろのことと決まった。そのことを語って幕を開ける紅葉賀巻は、『源氏物語』のなかでも史実との関わりがとりわけ濃厚な巻とされ、それは、現代の代表的な注釈書が、右の巻頭部分に次のような注をほどこす点にも明らかであろう（以下では、次に掲げる注釈書を一括してAとする）。

・この行幸については、古来さまざまの准拠説が行なわれている。そのうちの一つ、『花鳥余情』の延喜十六年（九一六）三月七日説によれば、行幸は天曆四年の消失以前の事となる
(玉上琢彌『源氏物語評釈』)

・この行幸は、延喜十六年三月七日、宇多法皇五十の賀のための朱雀院行幸を念頭に置いて書かれたものと思われる
(『新潮日本古典集成』巻頭解説)
・朱雀院が最もよく利用されたのは延喜・天曆（九〇一〜九五六）ごろ。准拠としてその時期の史実が指摘される。とくに醍醐天皇による宇多法皇の四十賀（延喜六年十一月七日）や五十賀（同十六年三月七日）などが有力
(『新編日本古典文学全集』)

・河海抄など古注釈は、醍醐帝主催の宇多法皇四十賀・五十賀を准拠として指摘する
(『新日本古典文学大系』)
紅葉賀巻の行幸は、史実（ここでいえば延喜年間のふたつの行幸）にもとづいて描かれたという理解であり、そこからはさらに、著名な「延喜天曆准拠説」（『源氏物語』は、紫式部の同時代を舞台として描かれているのではなく、それより百年ほど前を物語の舞台として設定しているのだという考え方）も導き出されてくる。読者もおのずと、そうした過去の時代を想起しながら、物語を読み進める必要があるというわけであるが、じつはこのような理解がひろくいきわたったのは、それほど古いことではない。

右に掲げた諸注釈書以前に出版され、それぞれに多くの読者を獲得した注釈書——島津久基『対訳源氏物語講話』、吉澤義則『対校源氏物語新釈』、池田亀鑑『朝日古典全書』、山岸徳平『日本古典文学大系』（以下では、これらをBとする）——をひもといてみるとどうであろう。これらの書に紅葉賀巻の行幸は、史上の延喜六年の行幸に准拠して描かれたとか、十六年の行幸がそのモデルであるといったたぐいの注は見出されず、あくまでそれは虚構の、物語のなかの出来事として扱われている。AとB、両グループには注釈態度に大きな違いが認められるのであったが、さて両者のあいだには、はたして何があったのであろう。

ここで鍵を握るのは、右にもその名が見える、『河海抄』という書物である。四辻善成（一三二六—一四〇二）によつてあらわされたこの注釈書は、一九六〇年代以降、にわかに注目を集めることとなった。次のような言説を見たい。

・「河海抄」なかりせば、「源氏」読解の基準は、帰するところを知らず、我々は混迷のうちに彷徨せざるを得ないで

あろうとさへ思ふ。…「河海抄」がなかったら、私は「源氏」研究に手をつける気さへ起きなかつたかも知れない。

(石田穰二「朱雀院のことと准拠のこと―源氏物語の世界」『学苑』一三八、一九六〇。のち『源氏物語論集』一九七一、桜楓社)

・(『源氏物語』の――稿者注) 第一部では古代の物語のもつさまざまな約束が作者の壮大な意図のもとに駆使されて、物語の骨組みをしっかりとしたものになっている。私はそれを河海抄に導びかれて知った。

(清水好子『源氏物語論』一九六六、塙書房)

右の著者たちが、やがて、Aとして掲げた注釈書の校注者たちにもなってゆくわけで、彼らによって(再発見)された『河海抄』に、紅葉賀巻の朱雀院行幸は、延喜六年と十六年の行幸に准拠する旨の注記があり、さらにこの書を見てゆくと、『源氏物語』に「准拠なき事一事もなき也」とか「桐壺御門は延喜」などといった見解まで見える。BからAへ――物語の朱雀院行幸は特定の史実にもとづいて描かれたといった趣旨の注記が登場する背景には、一九六〇年代の『河海抄』の再評価、それを発端とした『源氏物語』の古注釈書ブームといった研究史上のトピックがあったのであり、こんにちでは、そうした理解を前提にさらなる准拠探しが行われている。作者が紅葉賀巻を書く際には康保三年の臨時楽も参考にしたかもしれないし、寛弘二年の相撲節会も影響を与えた可能性がある、あるいはさらにさかのぼって嵯峨天皇の御代とのかかわりをもっと考えるべきである、というように。

物語と史実の関係に注目する『源氏物語』の歴史的研究は、このようなかたちで拡張の一途をたどってきたのであったが、しかしここであらためて次のように問い直してみたい。紅葉賀巻冒頭にAのような注記がどこされるようになったのは、明治生まれの研究者たちから大正・昭和に生まれた人々へと研究のバトンが渡されることによって、古い理解はあらためられ、物語の理解は一段とふかまったことをしめしており、現代の読者も『河海抄』の手引きによって、作者が真に意図したところ、当時の読者の読み取りによりやく近づくことができた――わたしたちは研究の現状をそのように把握し、そのめざましい進展に目をみはっていただければ十分なのか、と。

というのもこの物語を本格的に読んでみようとか、新たに研究してみようという人たちが、Aのいずれでもよい、現行の注釈書を手にしたとき、そこに想像するのはどのようなことであろう。紅葉賀巻を開いてみるとすぐそこに「この行幸は、延喜十六年三月七日、宇多法皇五十の賀のための朱雀院行幸を念頭に置いて書かれた」といった注記があり、かつ他の注釈書を参照してみても同様の説明がなされている。そうであるからには、延喜六年と十六年、二つの行幸についてはその実態がかなり詳しく把握でき、それが物語の記述とも細部まで一致する、ゆえに、作者紫式部が、史実にもとづいて物語の朱雀院行幸を描いたことは明らかであるとみなされ、それが各注釈書に反映されることとなった。読者が思うのは、そうした考証の過程にはかなるまい。紙幅の制約のために、その結論部分だけが欄外に掲げられたと考えるわけだが、しかしながらその実、紅葉賀巻の朱雀院行幸の(准拠)は、右のような手つづきに基づき、史実と物語の突き合わせを経て導きだされたものではない。

それは一見、奇異なことに思われるかもしれないが、しかし考えてみれば、ある意味当然のことで、紅葉賀巻の物語が重点的に描くのは、行幸にさきがけておこなわれた清涼殿前庭での試楽のさまと、それにのぞんだ人々のこころの諸相――藤壺を意識しながら青海波を舞う光源氏の妖しいまでの美しさと、それを御簾のかけから複雑なまなざしで見つめる藤壺、二人の関係を何も知らぬまま源氏の麗姿と藤壺の懐妊をただ喜ぶ桐壺帝、といった皮肉な関係――であり、その後におこなわれた朱雀院行幸の場面は、さほどの具体的記述もないままに、今回も源氏の青海波が格別であったことなどを語って、かなりあっさりと幕を閉じてしまう。延喜六年の行幸にせよ、十六年のそれにせよ、史上の朱雀院行幸に関しては、たとえば宇多法皇から藤原仲平を介して横被の被物があつたこと(延喜六年)や、試楽の際には天皇が南殿に出御して法皇の賀料たる陸奥の馬五十匹を御覧になったこと(同十六年)など、その実態をそれなりに明らかにできるのに対して、物語の朱雀院行幸はそうしたことについての記述を欠いているために――ゆえに、それは算賀行幸であつたとか、そうでなかつたといった基本的な点での甲論乙駁が、今もつづいているわけだが